

# 白山市俳句協会会報

白山市俳句協会  
白山市殿町310番地  
(千代女の里俳句館内)

千代女の句

春雨や

うつくしうなる

物ばかり

令和四年度

## 秋季俳句大会

日…令和四年九月二十三日  
所…妙成寺・国立能登青少年交流の家



今年の秋季俳句大会は三年ぶりに吟行句会となった。行先は羽咋市の妙成寺。参加者二十六名は乗車前に検温と手の消毒を行いマスクをし市のマイクロバス二台に分乗して出発した。曇天だったが途中千里浜なぎさドライブウェイを走るこ

とができ十時過ぎに妙成寺に到着した。雨がわずかに降る中各自思い思いに大伽藍を吟行した。秋の雨が古刹の静けさを引き立てていた。

一時間ほど吟行してから近くの国立能登青少年交流の家へ移動。投句後弁当の昼食を取った。食後山本時子さんがハーモニカ演奏を披露して下さり和やかな雰囲気となった。

俳句大会は森会長の挨拶で始まり、次に昨年一位だった田村峯子さんからトロフィーの返還があった。その後選句が始まった。結果は以下の通り。

### 入賞句

- 悠久の風の九輪や秋の声 山本 時子
- 伝蔵の墓碑銘微か秋の雨 中塚 稔
- 残る蚊に刺さるる雨の閻魔堂 寺尾 晴美
- 撫で清む浄行菩薩水澄めり 瀬川 恵
- 扁額の文字の朱塗りや秋澄めり 川崎 房恵
- 走り根の秋雨の苔ふくふくと 澤田 昭美
- 仰ぎ見て登り来て見る秋の塔 鈴木 恵子
- 凜として祖師の墓守の曼殊沙華 田村 峯子
- 身に入むや如来鎮座の丈六堂 南川 玲子
- 広がりし刈田見下ろす五重の塔 下村 純子
- 大伽藍の栄華の名残初紅葉 中村 双舟

## 第248回 千代尼忌

(墓前祭・俳句会)

日…令和四年九月八日 主催…聖興寺千代尼史蹟保存会  
千代尼を偲ぶ墓前祭は爽やかなの季語に相応しい午後には執行された。献句、献花、焼香、献箏(八千代獅子)に続き、秋風にのせておくるピアノトリオの調べを鑑賞した。その後「千代女を舞う」吉村ゆきその「世界」の映像上映などがあった。参加者五十五名。

作品抄(席題…鶏頭/秋の水/千代尼忌/囀目)

- 御手洗の竜の奏づる秋の水 宮口 征子
  - 秋扇閉ち裏方の顔となる 鈴木 恵子
  - 句行灯かかげ手水舎涼新た 山本 時子
  - 本堂に妙なる調べ千代尼の忌 大浦 春美
  - 千代尼忌やうねり通しの萩の白 瀬東千恵子
  - ルビといふ優しき響き鶏頭花 宮本 敦子
  - 秋蟬の終を高鳴く千代尼の忌 瀬川 恵
  - 秋水の音汲みこぼす龍の口 岡村 清美
- (協会員2点以上)

### 会員の活躍

#### 第16回角川全国俳句大賞

特選 宇多喜代子 選 森 悦子

#### 第31回芭蕉祭山中温泉全国俳句大会

特選 黒田 杏子 選 大國の理のなき戦馬酔木咲く 浜野 泰弘

#### ねんりんピックかながわ2022俳句交流大会

募集句 正賞 夏館夜風は森の香りのせ 中村 双舟

# 第106回 千代女全国俳句大会

日：令和四年十月八日  
主催：白山市

千代女全国俳句大会が三年ぶりに通常の形で開催され、県内外から百六十名が参加した。午前中の吟行は小雨の中、二台のバスが聖興寺、明達寺、若宮八幡宮を巡回した。席題は「秋草」と「囀目」であった。

午後は俳人協会理事の権未知子氏が「季語を遊ぶ」と題して記念講演をされた。権氏はこれまで集めた季語となっている生活用具や遊具などを一つひとつ手に取って説明された。例えば、種袋、紙風船、籠枕、陶枕、浮いてこい、水中花、起し絵、菊枕、砧、日光写真など二十数点が次々テーブルに並んだ。珍しい品ばかりで大変興味深い講演だった。

講演後、表彰式が行われた。兼題の部の総投句数は三、七一九句であった。

## 兼題の部

- 千代女賞 小川 軽舟選
- 遠き日の春の匂ひや卵焼 白山 花音
- 朝顔賞 出迎へは簡単服や島泊 小松 宮本ヒロ子
- つるべ賞 片蔭や盲導犬とバスを待つ 白山 宮本 敦子
- 千代女賞 片山由美子選
- 新涼や加賀の醤油に甘さあり かほく 沖野 晶子
- 朝顔賞 朝顔賞 白山 吉川 香織
- 白山の曇くつきりと青田風 白山 松田千代子

## 席題の部

(題：秋草・囀目)

- 千代女賞 黒田 杏子選
- 上皇のしづかな歩み桐の花 千葉 保坂 和郷
- 朝顔賞 白杖の人の手を取る秋の蝶 白山 森 悦子
- つるべ賞 独り夜の己が心音釣忍 白山 戸田 敬子
- 貝殻はガラスの壇に遠花火 白山 竹中 昭子
- 千代女賞 星野 椿選
- 炎天の匂ひの中に鎌を置く 神奈川 持田 敏朗
- 宮坂 静生選
- 千代女賞 君の手にほたる火移し求婚す 白山 宮岸 美苗
- つるべ賞 麦秋の大海原に立つ穂波 白山 北岸 雅通
- 千代女にもありし初恋虹二重 白山 瀬川 恵
- まんまるな赤子の拳走り薯 川北 米一 和美
- (朝顔賞、つるべ賞は協会員のみ、一人一句)
- 二席 秋草の加賀路ひたすら雲の機微 白山 瀬東千恵子
- 権 未知子選
- 駒形 隼男選
- 一席 秋草の名を訊ねつつ堤道 白山 中村 双舟
- 三席 秋草をベダルにからめ日暮道 白山 下村 純子
- 高橋 佳子選
- 二席 敷石のこもりと動き秋の草 白山 中川外代子
- 中川 雅雪選
- 二席 小鳥来る加賀の千代女に集ふ句座 野々市 中野 邦子
- 中西 石松選
- 一席 朝寒に箆筒の中を巡りけり 白山 北岸 雅通
- 三席 一竿に剥いて彩よく吊し柿 白山 清水 志郷
- (協会員のみ)

## 白山市政功労者表彰 市民善行者賞 前会長 川崎房恵さん

十一月三日、川崎房恵さんは白山市より、「長年にわたり、市俳句協会会長をはじめ役員として協会の設立に尽力されるとともに、俳句の普及に努められ、『俳句の里白山』を広く発信し、文化の薫り高いまちづくりに貢献された」として表彰された。

## 犀星俳文学賞

佳作 山本時子さん

第五十八回犀星俳文学賞佳作に山本時子さん(雪垣・水柱句会)の「美川町逍遙」が選ばれ、十月二十九日に開かれた令和四年第七十八回北國俳句大会の席上で表彰された。

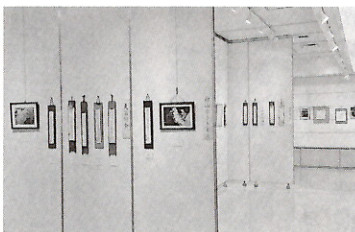
## 作品抄

連作二十句中自選五句

- 手取川合戦の碑を蟹走る
- 漬桶の干さるる匂ひ土用あい
- 涼しさや五十鈴通りの仏壇屋
- 船板塀残る館や梅を干す
- 美川港の赤き水門夏燕

## 市民文化祭・文芸展に出展

期間：10月29日～12月18日  
所：千代女の里俳句館



白山市俳句協会は市民文化祭・文芸展に協賛し、作品を展示した。会員から短冊、色紙、俳画、俳写の作品百十点が出展された。

# 第78回北國俳句大会

日…令和四年十月二十九日 所…北國新聞会館  
主催…石川県俳句文学協会

大会の成績は次のとおり。

## 兼題の部

(協会員一人一句)

金沢市長賞

団扇風送りて母の聞き上手

亀田紀代子

北國新聞社社長賞

山ひとつ洗ひ上げたる夏の雨

中川外代子

優秀句

白亜紀の石かもしれず川遊び

山本 時子

特選

秋空に貼りついてゐるガラス拭

中川 雅雪選  
亀田 蒼石

特選

懐かしき訛に戻る帰省かな

松本 慶子選  
金子 慶一

秀逸

黙禱の眉美しき原爆忌

高岡 幸子選  
松田 文女

薄闇の涼しさにゐる奥座敷

森 悦子

麦秋や野球少年変声期

瀬東千恵子

## 席題の部

優秀句

朴葉散る大きな息を吐くやうに

森 悦子

## 新会員紹介

竹多久美子(早春)

長清 幸子(個人)

崎川美和子(早春)

北岸 雅通(個人)

浜本 信子(千代野)

## 小林一茶百九十六回忌全国俳句大会

今回も募集句のみの選考となった。

(協会員一人一句)

### 〔募集句〕

佳作

少年の蝉鳴かせつつ帰りけり

山本 時子

黙禱の静寂を統べる蝉しぐれ

竹中 昭子

貝殻を小皿に飾る晩夏かな

森 悦子

ホットレモン窓際が好き山が好き

亀田紀代子

そよと吹く風は亡き夫送り盆

佃 久美子

仲良くと母の口ぐせ鯛雲

瀬東千恵子

宵涼し明かり矢となす新幹線

川崎 房恵

水に哭き水に喜び田を植うる

中村 双舟

鯛や平らに暮るる古戦場

濱本 寛

## 一茶の里・信濃町の方々と交流

千代女全国俳句大会には例年、信濃町から何人も参加者がいるが、今回初めて交流することが叶い、大会昼食時に短時間だったが歓談することができた。信濃町からは一茶記念館館長と職員の方そして俳句会の方三人の計五人、こちらは千代女の里俳句館館長と俳句協会役員六人の計七人が出席し、それぞれの大会の感想や楽しみなどを話し合った。

## 吟行地の紹介

17

### 鶴仙溪、無限庵を訪ねて

早春句会

コロナ禍で中止していた吟行を、三年ぶりに実現できました。七名の参加で車二台に分れ、逸る気持ちを抑えて目的地へ向かいました。行き先は山中温泉方面で、あやとり橋から鶴仙溪を散策しこおろぎ橋までの新緑と溪谷の風景、せせらぎの音を満喫しながらの吟行で、俳句の醍醐味を味わえる絶好の場所でした。句会の会場は「無限庵」という、旧加賀藩前田家家老の横山家が明治時代の末期に金沢に建てた武家邸宅書院です。明治時代の最高級木造建築で大正時代に実業家の新家正次氏が金沢から移築したものでした。ここでの上品な昼食の後、三句投句で句会が始まりました。いつもの例会とは違い会員全員が厳かな雰囲気で行なえた事は、当句会にとって貴重な思い出になったと思います。

次にはコロナが減衰し、マスク無しでのびのびと句会ができる事を祈って解散しました。

令和四年六月十九日実施

### 作品抄

黒柿のおぼしまの艶若葉風

川崎 房恵

銅鑼一打句会の知らせ夏座敷

濱本 寛

こおろぎ橋に残る木の香や初夏の風清水 志郷

山中の瀬音の優し小紫陽花

中野 邦子

せせらぎの音こだまして若葉風

竹多久美子

青楓木組美しこおろぎ橋

下浜 まり

万緑やあやとり橋の色映えて

齊藤 勝史

(齊藤 勝史記)

## 訂正

会報19号に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

P2 ◆「俳句と写真展」

喧騒を逃れ水きは風薫る

北野佐由子

(喧噪↓喧騒)

第5回 冬の愉しみ 募集期間：十一月一日～一月十三日 季題：冬一切 投句数一三二句

入選句

刀工のほむら青々初仕事 風花や花街を縫ふ人力車 狛犬の赤き前垂れ初時雨 着ぶくれて集ふ会所や正信偈 参道の福藁踏みて杖の人 傍らに猫の来てをり毛糸編む 一合に酔ひほろほろと去年今年 火の気なき蔵の出入りや年用意 がむしゃらに働かし日々冬木の芽 煤逃げの夫に床屋のほひかな

瀬東千恵子選

川崎

森

坂口 柚卯 水上 白雪 川崎 房恵 米一 和美 米田 和子 山田 三和 松田千代子 亀田紀代子 東 智子 亀田紀代子 房恵選 石尾サチコ 瀨川 恵 米田 和子 福田千鶴子 坂口 柚卯 石尾サチコ 瀨川 恵 山田 三和 亀田紀代子 横山 茂樹 悦子選 川崎 房恵 中川外代子 南房 朋美 鈴木 恵子 北野佐由子 永盛富佐恵 辰巳 葉流 山本 時子 澤田 昭美 亀田紀代子

第50回千代女青少年全国俳句大会表彰式

日：令和四年十一月二十六日 所：千代女の里俳句館 主催：白山市・白山市教育委員会 後援：白山市俳句協会・NHK金沢放送局

入賞作品

大賞

サイダーをコップに注ぐ音が好き

〔小学生の部〕

特選

ねじ花にきらきら光る雨のつぶ

秀逸

さあいそげつぎのじゅぎようはプールだよ

秀逸

かけ足で校門を出る夏休み

佳作

すなはまでしゃがんでさがすくらがい

佳作

川あそび石なげじようずパパスこい

〔中学生の部〕

特選

白山に負けずと胸張る雲の峰

特選

背負い投げ響く一本！光る汗

秀逸

準決勝畳に落ちて終わる夏

秀逸

青空にこぼしたえのぐ雲の峰

秀逸

姉さんの浴衣ひらひらゆれている

佳作

雲の峰白山横に背比べ

佳作

演奏が響く空には雲の峰

〔高校生の部〕

佳作

勝ちに行くこれが最後の夏だから

俳画の愉しみ展

春の鼓動

期間：一月十四日～三月十二日 所：千代女の里俳句館

十六句会と青少年少女俳句塾より計五十九点の作品が展覧され、次のとおり表彰された。

千代女の里俳句館館長賞

日だまりに蠟梅の香匂ひけり

白山市俳句協会会長賞

溪流の岸辺さやぎし猫柳

池野 裕子 小寺 和美

謹告

謹んでご冥福をお祈りいたします。

永瀬 幸子さん(令和四年十二月二十四日逝去、91歳)

一笛に涼の集まる能舞台

秋風や一碑を以つて城址たり

米田 洋三さん(令和五年一月四日逝去、89歳)

海鳴りを消して初荷の貨車過ぐる

俳友の恩恵二十年卒業す

近吉 三男さん(令和五年一月七日逝去、106歳)

百一歳朝顔に水転ぶなよ

九条は地球の宝日本晴

編集後記

コロナ禍の続く中、諸活動が徐々に動き出しました。吟行も少しずつ実施されるようになってきました。とは言え油断は禁物。皆様どうぞお大事に。

編集委員一同



# 令和四年(2022年)『今年の私の一句』

会員一人一句自薦句  
句会名 五十音順  
句会員 五十音順

## あさがほ

喧騒を逃れ水ぎは風薫る  
草の実をつけて歩いたバスの道  
引つ越しを終へて今宵は星まつり  
独り夜の己が心音釣忍  
ラヂオより「少年時代」雲の峰  
卒部式終へし子包む秋夕焼  
迎盆夫の好みのハイボール

北野佐由子  
立花 雅子  
都築 和典  
戸田 敬子  
宮城ゆき子  
吉川 香織  
和田 恵子

## かたかご

白山の風に戻され初雀  
つり人は男ばかりや秋の潮  
軽井沢旅に選びし夏帽子  
新樹光チェリスト来たる集会所  
色あせて吊るさるままの秋簾  
木の実降る日は図書館で過ごしたき

小倉 京子  
澤田 昭美  
新谷 英子  
寺尾 晴美  
松田 哲章  
宮岸 美苗

## 木の芽

蔦からむ限界村の夕日かな  
うららかや母の前行く三輪車  
水温む五指のびのびと菜を洗ふ  
結び髪に水引き飾る秋祭

石尾サチコ  
清水 悦子  
馬場智恵子  
米永 真弓

## 早春

新樹光宮に奉らる大錨  
冬の空未知なる今宵の天体ショー  
菊花展一花に託し入院す  
一竿に剥いて彩よく吊し柿  
そばの花河岸段丘ジオパーク  
湯気あげて大地息吹けり露の臺  
小鳥来る加賀の千代女に集ふ句座  
この地平絶えぬ争ひ天の河

川崎 房恵  
崎川美和子  
齊藤 勝史  
清水 志郷  
竹多久美子  
中川 博秋  
中野 邦子  
濱本 寛

## 春嶺

湯の宿の一汁一菜終戦忌  
山野草めぐみ渋みも春の使者  
ほほゑみの平和祈るや終戦忌  
集落を逆さに写し春田かな  
簾越しに亡夫の笑みの遺影かな

浅田 洋子  
崎田外代子  
中村 義子  
塗師 章友  
森元小夜子



白さうび

竹の秋まだそこにある父の椅子  
 不意の香の木犀さがす散歩道  
 山並の暮るる速さよ九月尽  
 一斉に轟く除夜の汽笛かな  
 ルビといふ優しき響き鶏頭花  
 熊鈴の響く木道初夏の風  
 信濃路をゆつくり過ぎて颯雲  
 新刊の葉進まぬ残暑かな

大浦 春美  
 坂口 柚卯  
 瀬法司育子  
 佃 久美子  
 宮本 敦子  
 本 真奈美  
 横山 茂樹  
 米一 和美

宙

短夜や病の床の物思ひ  
 緑蔭をしばし忘我の風流る

折戸 吉和  
 竹元 誠一

高根社

もう少し生きよと聞くや秋の蝉  
 誕生日迎へる今日の五月晴れ  
 比咩宮の朔日参り澄涼し

武部 葉子  
 寺西 紫芳  
 南房 朋美

千代野

人の無き幹線道路銀杏散る  
 手枕や薄目明けつゝ炬燵猫  
 故郷は声かけおうて墓参  
 蹠の濡るる畦道秋の草  
 初紅葉乙女の耳朶の染むること  
 鶯餅亡父の指の太さかな  
 線香を母はひとりで母の日に  
 嗟峨野辺に晚鐘ひとつ冬ざるる  
 牡丹や手に書きて読む句碑の文字

浅川 靖明  
 伊藤 福枝  
 井山 芳江  
 川辺 朗  
 澤枝 淑子  
 新橋 勝年  
 竹内由美子  
 浜本 信子  
 村上 利江

土筆

絵日傘を回して見てる日本海  
 冬銀河呪文のような鏡文字  
 待つ人に高く応へて白日傘  
 カールより人声消えて月涼し  
 目の色は翡翠のごとし疣むしり  
 月光はこゑ欠く君のこゑならん  
 大空を映す田水や遠郭公  
 生涯をこの家に添ふて柿の花

大岸 節子  
 大本久美子  
 亀田紀代子  
 亀田 蒼石  
 住 玲子  
 竹野 勲夫  
 福村外茂子  
 松田富美枝

氷柱

爪立てて剥くや熟柿の透明度  
 白髪の二人はるかに夕花野  
 群青の絵具一本文化の日  
 囀りや考の付箋の唐詩選  
 走り根を栗鼠走りたる冬隣  
 車庫の奥耳を澄ませば子猫かな  
 夜叉面の男撥打つ夏祭  
 少年の眉美しき祭笛  
 リュックには西瓜がひとつ母来る  
 白亜紀の石かもしれず川遊び

上田まさ子  
 御館 和子  
 瀬川 恵  
 瀬東千恵子  
 竹中 昭子  
 竹俣 修  
 中塚 稔  
 松田 文女  
 森 悦子  
 山本 時子



白山馬酔木

卒園の子ずしり来る膝の上  
 子の顔の能面となる稲光  
 青葉風ネクタイ結ぶ手も慣れし  
 柚子の湯や骨皮のひとそと入りぬ  
 秋暑し戦ふごととき四重奏  
 秋めくや濃き焼印のがんもどき  
 先生もソーラン踊る運動会

太田恵理子  
 岡村 清美  
 金戸 博子  
 喜多 卓郎  
 中村眞知子  
 福田悠美子  
 宮口 征子

白山ホトトギス勉強会

花の山吉野に惚ぶ人のあり  
 野の色に沈む秋蝶飛び立てり  
 縄暖簾くぐれば限りなき夜長  
 笠ひとつ動く遠見の田草取  
 しばらくは車窓開けゆく今朝の秋

岩本 松江  
 金子 慶一  
 辰巳 昌彦  
 西 登美枝  
 福田千鶴子

初音

野草の虫の音高し夜半の郷  
 干戈なき黄昏眩し花菜風  
 ずわい蟹並びし傍を買はで過ぐ  
 遠き日の春の匂ひや卵焼  
 夏闌ける回向柱の天を衝く  
 逃げる子の背に弾けり水鉄砲  
 噛み合はぬ卒寿の会話うららなり  
 落人の伝えの湯屋や秋深し  
 寒紅梅色なき庭を彩りて  
 犬の牽くりード小躍り土手青む  
 明日退院の部屋へ月光こぼしけり

荒井 明子  
 荒川 周治  
 川畑 武敏  
 佐藤 花音  
 隅田 正代  
 中江 幾江  
 坂東 久治  
 坂東 哲夫  
 古本比呂子  
 増田 圭子  
 村井 香月

花氷

猫とゐて命永らへ日向ほこ  
 穏やかに卒寿の道や初日の出  
 白山の襷くつきりと青田風  
 平和なる朝餉の匂ひ青簾

木下 英子  
 松井 富子  
 松田千代子  
 宮嶋 秋子

林中すずかけ

四枚のカレンダーめくる秋の風  
 点眼の一滴に知る今朝の秋  
 天高し卵焼器を新調す  
 星飛んで闇に傷跡なかりけり  
 老犬をとときどき胸に秋の暮  
 馬鈴薯や鈴なりいもの小さきこと

石場 美幸  
 崎田 富代  
 下村 純子  
 辰巳 葉流  
 中村佐栄子  
 松田 文子

ふきのとう

朝顔に降る雨にさえ癒される  
 蛙は消え只只眺む大出水  
 夏ゆくや同僚二人退職す  
 落花生探りあてたる土の中  
 里山や行く先々に藤の花  
 裏庭の光集めし榎櫃の実  
 心地よき風の静寂や月天心  
 蜘蛛の囀を小枝で払ふ山の径

石川 文子  
 上出 順子  
 河本外美子  
 小鍛治雄一  
 下田 康子  
 東野 欣子  
 正木志都子  
 松江 善春



蕪城吟社

落葉して尖る大樹の男振り  
奥泉外美子  
青竹の御手水三筋冬に入る  
関 玲子  
スニーカー蹴散らして行く落葉道  
谷口外喜恵  
秋草の名を訊ねつつ堤道  
中村 双舟  
咲くよりは地の鏝はやし落椿  
水上 白雪

美川俳句協会

寝そびれてそつとジャズ聴く秋夜長  
有川 征次  
持ち寄りて菊をほめ合ふ喜寿傘寿  
石本 秀一  
母よりの一荷の隙間柿三つ  
乾 哲也  
秋日和動かぬ松と虚子の句碑  
大田 敏博  
夕影にひと叢あはき野紺菊  
小寺 和美  
潮の香や鳥清碑かこむ草若し  
小寺 盟  
水仙の若芽が並ぶ通学路  
新城恵美子  
春の海波静かなり小松原  
隅田 悟  
蒼天へ葎切の声突き抜けり  
中村 八郎  
窓越しに鳥の来ている初湯かな  
山田 三和  
爽籟の飛驒路めぐりやバス旅行  
米田 和子

みたらし玫瑰

春夕焼ハウス中まで染めつくす  
池野 裕子  
球児らも黙袴をする終戦日  
下浜 まり  
御取越香の漂ふ村の辻  
相古 誠一  
亭亭と梅の並木や蟬しぐれ  
西田はる恵  
大銀杏伐りて広がる鱒雲  
浜野 泰弘  
終止符のなき楽譜らし囀れり  
東 智子

麦 笛

ゆくりなく訪ねる里や麦の秋  
大友まり子  
桜満つ校門に声の新し  
田村 峯子  
無住家の草高くしてきりぎりす  
永盛富佐恵  
朝顔や免許返納しふる父  
西野 彰宏  
箱一つ柚子五十個の重さかな  
西野 可祝  
佇みて風の音聴く麦の秋  
南川 玲子  
秋空や体操をはる深呼吸  
宮本ヒロ子

桃の花

白山の寒の水もて糊を溶く  
浦上 章  
岩伝ふ水に打たせてある麦茶  
大橋美代子  
海へ果つ花野の先は利尻富士  
加藤 和子  
よちよちと転んでも青芝が好き  
北 重子  
獅子吼嶺の天空借りて吉書揚  
鈴木 恵子  
日矢差せば深秋の影山の池  
中川外代子

個人

散り初めし桜のむかう昼の月  
畝村早緒美  
麦秋の大海原に立つ穂波  
北岸 雅通  
女郎花観てより憶良のこと不図  
米田 紀子

